

交流を通しての協同的な学び[†]

小林 功*・高柳 恭子**・岩渕千鶴子**・五十嵐市郎**
原 由美**・前原 由紀**・稲川 知美**・星野さやか**
宇都宮大学教育学部*
宇都宮大学教育学部附属幼稚園**

交流、連携がさげばれて久しい。今、どこの幼稚園保育園を見てもなんらかの交流（小学校、養護学校、地域のお年寄りなど）が行われているだろう。しかし、交流、連携とは何のために行うのであろうか。流行だから？相手がやってくれと言ってくるから？いろいろな理由が考えられる。いずれにしても交流、連携をするにあたっては時間をかけ子供たちに新たな経験をしてほしい、そこから何かを感じてほしいという願いをもってかかわっていく。これまで当園で行ってきた交流活動の実際（国際交流の会・聾学校との交流）を紹介しながら5歳児にとっての交流の意味を探ってみたい。当園ではこれまで附属小学校・中学校・養護学校・公立中学校・高等学校・近隣保育園・外国人留学生・県立聾学校などと交流をしてきた。そこで当園の交流として特色がありその意義の大きい外国人留学生との交流が主である国際交流と聾学校の幼児との交流を取り上げ紹介してみたい。

キーワード： 協同性 学び 交流 連携

1. 当園における交流活動のながれ

(1) 国際交流

国際交流会が始まったのは今から約5年程前のことである。保護者の間から「これからの子供たちは国際感覚を身に付けていることが大切で、小さいうちから外国人と接し異文化に触れておく必要はないか？」と提案され、保護者の熱意を受け「国際交流の会」を共に考えたことに端を発している。今では、高校生の留学生約10人前後と毎年、年1～2回行っている。（当日は保護者の企画のため通訳の保護者や、一緒

に遊びを進める保護者が保育の中に入って活動する）また、当地に居を構える英国出身の外国人女性（エミリー）と子供たちとの交流も行っている。

(2) 聾学校との交流

当園には同じ大学の附属学校として養護学校があり、そこは20年以上の交流の歴史をもつ。（宇大附属幼稚園研究紀要第47号参照）県立聾学校は平成14度末に閉園したみさお幼稚園と交流を続けてきた歴史があり、それを引き継ぐ形として15年度より公立園としての本園との交流を行っている。附属養護学校には残念ながら幼稚部はなく小学部との交流であるが、聾学校には幼稚部があり、障害をもった同年齢の子供たちとの交流である。

また、幼児同士の交流だけでなく教師同士、

[†] Isao KOBAYASHI*, Yasuko TAKAYANAGI**, Chiduko IWABUCHI**, Ichiro IGARASHI**, Yumi HARA**, Yuki MAEHARA**, Tomomi INAGAWA** and Sayaka HOSHINO**

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** An Attached Kindergarten, Faculty of Education, Utsunomiya University

明日の交流に備えて互いの幼児の今の状態を話し合い、前日に環境を一緒に作り交流に備えてきた。そうすることで教師同士コミュニケーションも深まり、環境を通して行う教育について十分に話し合うことができ、互いにより刺激となっていたことは交流の産物といえるだろう。

2、交流の実際

(1) 国際交流

留学生とのかかわり

交流をするにあたり様々なねらいをもって、いくつかのやり方を試みた。

1回目は「遊びながら外国の人とふれ合っほしい」と考え、いくつかの遊びのコーナーをもうけて、子ども達が自分で興味のある遊びを選べるようにした。しかし遊びそのものを楽しんでしまい外国の人とかかわりが深いものにならなかったという課題がのこってしまった。

そこで2回目の交流は、各クラスに留学生が入り個々にかかわれるような交流を行った。これは1～2人の留学生とじっくりかかわれるため留学生本人やその母国に対し興味関心が広がっていくことを願い、行ったものである。各クラスに入ることであいさつや外国語を使ったゲームなどじっくり取り組み一人一人が留学生を身近に感じると共に幼児の思いで同じゲームを何度でも繰り返せるなど、より外国人や留学生に親しめるものとなった。

しかし、「自分達の遊び」ではなくその日設けられた遊びを子ども達が選ぶので子ども達の重いが薄くじっくりと取り組めずにいる子が見られた。そこで幼児が日常している遊びの中に留学生も加わり一緒に活動するという交流を行った。日常的な遊びを中心とすることで幼児がじっくりと遊びに取り組み留学生と遊ぶ中で深いかかわりがもてることを期待するとともに遊びの中でやり方の説明やルールを伝えるなど留

学生との自然なかかわりを願ったものである。

現在では、遊戯室などで全員一同に会し自己紹介や自国のあいさつの言葉や遊びを紹介した後、子ども達が楽しんでいる遊びに留学生に入ってもらいやり方で行っている。

事例1 「へび鬼しよう」

園庭に出てそれぞれが好きな遊びのコーナーへ向かっていく。プレーマウンテンの下では白線を引き、3・4・5歳児と企画の保護者が混ざり参加の留学生とともに2つに分かれ、へび鬼が始まった。子供たちが行う様子を見ながら留学生も一緒にじゃんけんをし遊んでいる。アメリカからの留学生の前に並んでいたえりこが彼女に向かって「アメリカにもへび鬼あるの?」と聞いた。「へび鬼?・・・NO。ないよ。でもじゃんけんはあるよ。」と日本語で返した。「じゃんけん?どうやるの?教えて教えて」と聞くと「ストーン・ペーパー・シザーズって言うのよ」と教えてくれた。みきたちは自分の近くにいた留学生に「じゃあ、オーストラリアでは?」とか「ドイツでは?」などの質問をしてじゃんけんの掛け声を聞いていた。その後えりこが「ねえ、英語でじゃんけんしてへび鬼やろうよ」という提案をし、英語でへび鬼が始まった。3歳児・4歳児はへびの上で保護者に言葉を教えてもらいながら、5歳児はみんなですべて1、2度じゃんけんをしただけで覚えてしまう子、へび鬼の中で覚えてしまう子など、参加したほとんどの子が「ストーン・ペーパー・シザーズ」を言いながらへび鬼を行った。新たに、雰囲気を感じ仲間に入ってきた子たちにはえりこや年長組の子供たちが「あのね・・・」とやり方を伝え1、2度練習した後すんなり遊びに加わっていった。

〈 考 察 〉

保護者の発案で始まった国際交流会ではあったが子供たちにとって大きな意味があったようだ。3歳児は、初めて目にする「知らない言葉」を話す人たちに驚き・戸惑い担任のそばを離れられなかったり、興味を示すものなかなか近くに寄れなかったりという反応を示す子が多かった。4・5歳児になると外国人をほとんど意識することなく普通に接しているようだ。今、テレビでも街中でも子供たちの生活の中に外国語があふれている。NHK教育テレビでも「英語であそぼう」という番組が人気をえたり、テレビヒーローものの影響で色を表す表現も「赤」や「青」ではなく「レッド」や「ブルー」を使う子も多い。言葉のもつ響きのよさにひかれ使うことに異論を唱えることはしないが、言葉や意味がもつ背景（どういう人たちが使うのか、どういう国で使われているのかなど）についてはあまり伝わっていないように感じる。国際交流会を通じ、本物（ネイティブ）に出会う、異文化に出会い外国を感じ、興味・関心を向けていくようになるという保護者や教師が願ったことが少しずつ伝わったように思う。言葉はわずかしか通じなくても、遊びを通して「言葉ややり方は少し違うけれど同じことができるんだ」ということを感じているように思う。

外国人女性（エミリー）との交流を通して

集団としての国際交流会を通じ子供たちの笑顔にふれ有効性に気づいた本園のPTA会長から「日本に住む旧知の外国人女性（エミリー）が子供たちと遊びたがっているのでぜひ遊びに来させてほしい」という申し出を受けた。保育や国際交流会等の行事を実際に体験し当園の教育の考え方をよく理解してくれており、そういった形での保育参加に新たな可能性を見出せると判断し申し出を受けた。隔週一回、昼食を共

にしながら3～4時間幼児のしている遊びを共にすることで子供たちと触れ合っていくという交流がスタートした。（彼女は日本語がまだそれほど上手ではなく保護者や教師が通訳のようについていた）行事のように一時的に終わるのではなく日常的なかかわりの中での交流のもつ意味についていくつかのエピソードを紹介し考えてみたい。

事例2 「じゃあ、僕が教えてあげる」 (4歳 1月)

正月明けクラスではカルタ取りが盛り上がっている。カルタに興味をもったエミリーが入ってきた。教師が札を読み子どもとエミリーと一緒に絵札を取り合っている。エミリーよりも子ども達のほうが絵札を先にとるので「エミリー下手だなあ」と言われてしまった。

エミリー（笑いながら）「日本語よくわかりません。勉強中です。」と答えるとまさる「じゃあ、僕が教えてあげるよ。いい？いくよ。あ・い・う・え・お・か・き……………わかった？」

と50音をすべて言い得意げに同意を求めている。

その後もカルタを2度ほど一緒に行ったが、子どもとエミリーの絵札の取り数は同じくらいであった。



事例3 「イギリスにもハムスターいる？」

(5歳児 1月)

弁当をもってきたエミリーと年長組が一緒に弁当を食べることになった。みんな隣に座ってほしくて「ここ、ここ」とせがんでいる。弁当の準備(当番が机を拭いたり、お茶をくんだり)が整うまでいろいろな子の隣に座って話をしている。

まみ「くじらって英語で何て言うの？」

たかし「何歳？」「子供は何人いるの？」など質問攻めに合う。

ゆうじの隣に来た時、保育室で飼っているハムスターを見つけ覗いていたエミリーの様子に気づき

ゆうじ「イギリスにもハムスターいる？」と問い掛ける。

エミリー「Of course. もちろん。」

ゆうじ「へー。いるんだ。ふうん。」となんともしない顔。

(少し考えて)「これよりもっと大きいのか？色は？雄も雌もいるの？」

と自分の疑問をたくさんエミリーにぶつけていき一つ一つ答えをもらい、納得したように笑顔になっていた。弁当の準備が整いつつものように当番が前に立ち

当番「用意はいいですか。では、いただきます」

みんな「いただきます。」

エミリー「アハハハハハハ・・・」

みんな「？」

〈 考 察 〉

行事としての国際交流会のようにイベント的に行う交流と違い、隔週で、しかも昼食を共にする3～4時間という時間で幼稚園に遊びにきて子供たちと触れ合っていくという交流では幼

児が感じる親近感は比べものにならないほど大きい。また、言葉が思うように通じないからこそ、工夫して伝えようとしたり、自分の知っている英語で気持ちを表現しようとしたりするのだろう。

また、エミリーの人間性によるところも大きい。幼児の中に自分から入っていき積極的にコミュニケーションをとったことで、教師や友達の前では恥ずかしがったり、面倒がったり、自信が持てずに普段やらないようなことも思わずやってしまう、という状況や雰囲気を作っている。多分われわれ教師が同じことを同じようにしても幼児はエミリーに示したような反応は示さないだろうし、幼児も雰囲気によってしてしまったのだろう。

こうした交流を続けるうちに、我々は4歳児と5歳児とではエミリーに対する接し方が違うことに気づいた。4歳児ではエミリーを外国人という意識をせず、自分(自分たち)と遊んでくれる大人の一人という接し方をしていた。一方5歳児になるとエミリーを外国人として認識し彼女自身へそして彼女のもつ背景(祖国やその習慣など)にも興味関心を広げている。(事例3より) そうしたやりとりやかかわりの中で5歳児は外国について色々と思いを膨らませ、エミリーを通し自分の世界へ取り込み、思いやかわり方を広げようとしているようだ。

～5歳児にとっての国際交流の意味(発達をふまえて)～

「これからの子供たちは国際感覚を身に付けていることが大切で、小さいうちから外国人と接し異文化に触れておく必要はないか？」という保護者の意向からスタートした国際交流会であるが、実際の交流を通して少しずつその目的の達成に向かっているように感じる。さて、4歳児、5歳児についての交流の様子を紹介した

がここでは特に意義が大きいと感じた「5歳児にとっての国際交流の意味」について詳しく考えてみたい。

5歳児は外国人その人への興味・関心も広がるし、個人を通してその背景（生まれた国・言葉・習慣など）にまで興味関心を広げていく。それは事例1のじゃんけんの場面でも見て取れる。「ストーン・ペーパー・シザーズ」とは「石・紙・はさみ」のことだと気づいていき、言葉と意味を結び付けていく。あの後えりに「何で日本ではじゃんけんっていうの？」と聞かれた。「けん（拳）という言葉にはね、手や指を動かして勝ち負けを決めるって言う意味があるんだよ」と伝えると「へー。そうなんだ」とにこっと微笑んでいた。外国を知ることによって日本を知ることになったのだ。留学生や教師との遊びや会話を通して「なぜ？」「どうして？」「ではこれは？」など自分なりの疑問をわかせていく。そうした疑問を直接尋ね、解決しようとする通して言葉や自分が体験し不思議に感じたことの意味にまで気づいていく。また、事例3において弁当時エミリーが、子ども達が「いただきます」というのを聞いて笑ったという場面を紹介した。不思議に思ったので「どうして？」と聞いてみた。すると「イギリスでは学校などで食事をする際、お祈りはしてもみなで声をそろえて食事の挨拶をする習慣はない。だからおかしかった」という答えが返ってきた。そのことを文化の違いの1つと感じたのでクラスに話してみた。子ども達も「面白い」と言ったり「ふーん」と納得したり様々な反応が返ってきた。その中であきは「でも、みんなで声を合わせると気持ちいいよね」という感想をもらった。それに同調する子も何人かいた。幼児は外国の文化を介して自国の文化を再認識しているといっただろう。また、ハムスターの事例を通しては自国と異国を比較し、「日本の

ハムスター」と「外国のハムスター」を意識しているととらえることができる。大人なら経験や知識を介してハムスターの大きさや色など予想がつく。しかし5歳児はエミリーの話を通して「外国」を見つめ、自らの興味関心をぶつけている。イギリス人のエミリーを通してイギリスを、ひいては外国を知ろうとすることに他ならない。

事例4 「これはどこの国でしょう？」
(5歳児 11月)

保護者の企画でゲストの母国の国旗をつくり歓迎することになった。国旗が描かれた本を見ながら作っていったが、ゲストの国の国旗を作り終えると、本をめくりながら「ねえ、これはどこの国？」「あ～、〇〇かあ」「ねえ、△△の国描いていい？」と興味を示し次々と描いていった。その時「これどこだ？」と教師が日本を示した。「にほん」とみな同じ答え。「では、これなんだ？」と日の丸を示した。「お日様」という答えが返ってきた。「じゃあこれは？」とアメリカ国旗の星の部分を示した。「アメリカ」と言う答えは返ってきたが星の意味は返ってこない。「これはねえ・・・」と国旗のもつ意味を話すと皆興味をもち次々と国旗を示し「これは？」「これは？」と聞いてきた。

国際交流会の後、教師や友達を相手に国旗を見せては「どこの国だ？」とクイズのように聞いてくる子が何人か出てきた。

国旗を通して外国を知り興味をわかせているが、幼児の知的好奇心を刺激したようだ。5歳児はこうした事例からも推測できるが、いろいろなかわり方をしていく中で様々な事柄を関係付けていく。また、目の前の事象から自分

の経験を踏まえイメージを広げたり、推測をしたりしていく。3・4歳児は自分と「もの」や「人」とのかかわりの中で遊びや生活を広げていく。(事例2より)一方、遊びや生活の連続の中で自分の経験を様々な事柄に結び付けていくのはやはり5歳児ということになるだろう。それまでの他者とのかかわりのなかで相手の思いに気づき自分のかかわりを考えていけるようになる5歳児の発達において可能になるだろう。それは違いに出会うことで同じ部分を見つめ本質に迫ろうとすると考えていいのではないか。

5歳児が自分の経験を踏まえ、様々な事象に興味関心が向くことを考えるとき、国際交流会の位置付けとは、なにも「外国を知る」「異文化に触れる」だけではなく、「異国(異文化)を感じることで自国(日本文化)に気づく・関心を向ける」ことといえないだろうか。外国を感じ日本を感じ、世界や外国語への関心を広げ、ひいては世界の歴史にまで関心が広がっていく可能性の芽を秘めたこの交流の意味の大きさを感ずるのである。

(2) 聾学校との交流

聾学校との交流会が始まって2年目になる。在学者との関係で年によって学年の構成人数に差があるが概ね1学年3～10名程度が在籍している。交流は1日限りのイベント的なものではなく3日～5日を継続して、年2～3回行われる。そこでは「遊び」だけでなく「お弁当」を一緒に食べるなど朝から降園まで1日の生活を共にするという交流である。いわゆる幼稚園での生活の場をお互いの園・学校に移す形で行われ、幼児・教師同士のコミュニケーションが多く図れたり、一緒に環境を構成していくなど効果も大きい。

4歳児交流の実際

事例1 「僕の名前わかるかな」 (4歳児 11月)

聾学校との交流を前に聾学校で作成した先生や子ども達の顔写真と一緒に指文字が書かれた指文字表を保育室に貼りいつでも見られるようにしておく。何人かの子どもたちは写真や指文字に興味を示し見たり、友達と一緒に自分の名前を指文字で表現しようとしたりしていた。あきひろは自分の遊びの合間など表の前に立ち止まり自分の名前を指文字で表現していた。

当日、聾学校の友達と先生方の自己紹介が終わり幼稚園が設定した環境の中で、遊び(交流)がスタートした。初日ということもあり互いになかなか打ち解けられない様子。そんななか指文字を練習していたあきひろは聾学校の教師のもとへ行き、「僕の名前わかるかな」といいながらやってみせた。「あ・き・ひ・ろ・・・あきひろ君って言うんだ。聾学校のお友達にも教えてあげて」と言われ緊張した面持ちから笑顔になり聾学校の友達に「こんにちは。(言葉)僕はあきひろ(指文字)です」と挨拶をしにむかった。

事例2 「どうして英語を話すの？」

(4歳児 6月)

三輪車に乗っていたしようたがちょっと離れた隙に聾学校の子が乗ってしまった。しようたが「だめ」とハンドルをもって何度も言うが通じない。聾学校の先生が仲裁に入り、あとで貸してもらおうということでその場は収まった。その後しようたが担任のところへきて「先生、どうして、あの子は英語を話すの？」と聞いてきた。

〈 考 察 〉

4歳児にとって初めての交流会である。新しい友達との出会いを楽しみにしている子、先生から交流の話をされても関心も示さない子、など一人一人様子は違うが「指文字」には興味を示した子が多い。遊びの合間や食事、降園の前など人だかりができ会話を楽しんで自分なりに表を見ながら指を形作る姿があった。事例1は自分なりに興味をもったことを試し、耳が聞こえにくいという事実を感じながら新しい友達とどうかかわっていったらいいのかを自分なりに表現した姿であろう。また事例2においては6月の交流会ということもありまだまだ子供たちには自分の遊びを展開することで楽しい時期である。そんな中の交流であるため聾学校の友達であろうと自園の友達であろうとかかわり方にさほど変わりはないように感じる。言葉では通じないという事実をやりとりを通すことで初めて気づいていった貴重な事例である。4歳児にとっては担任から聾学校の「友達がくるよ」と言われても友達が増えると考える程度で積極的にかかわっていくことはあまりないようだ。しかも、一緒にかかわってみると言葉が通じない、思いが通じないと感じ深いかわりは期待できない。だからりょうたのように自分には通じない言葉を「英語を話す」という言い方で表現する。4歳児にとってはこうした戸惑いが「聾学校の友達（上手に言葉が話せない）」を感じる最初の段階ではないだろうか。



5歳児交流の実際

事例3 「大丈夫かな・・・」

(5歳児 6月)

年長の前庭を使って遊ぶことになった。前庭では池や川を作って遊びが続いている。こうへいたちがやっている川作りにははなこが入ってきた。といを使ったりホースを使ったりしながら遊んでいる。はなこが池の中に入ってきて、といをつなぎ足そうとしている。その様子を見たこうへいが聾学校の先生に「大丈夫かな？」と聞いている。「どうしたの？」との問いに「だって、水にぬれちゃいけないんでしょう？」と耳を指差した。聾学校の先生はこうへの言葉を受け「そうだね」と、はなこを呼び補聴器をはずした。

事例4 「こんなに大きい音なの！」

(5歳児 1月)

聾学校での交流のとき、何人かが補聴器体験をした。補聴器を耳に入れてもらい体験すると一様にびっくりしたような表情になった。幼稚園に帰り、補聴器を耳に当てたためぐみに「どんな風に聞こえたの？」ときくと「大きな音だった」という返事。「どれくらい大きい音だったか声に出してみよ」と頼むと「わあー」と保育室じゅうに響く大声をだし、なかには耳をふさぐ子もいた。「うるさい」と多くの子が口にした。担任がその声を受け補聴器の役割を説明するとみな「ふ〜ん」と言ううなずいている。しかしゆりこは「私たちと同じように聞こえるならどうしてあすみちゃんは私たちが呼んでも返事してくれないの？本当に聞こえてるのかなあ」と疑問を投げかけてきた。

〈 考 察 〉

4歳・5歳と2年目の交流である。それぞれが顔や名前を覚え、来ることを楽しみにしている。補聴器についての話は4歳でも5歳でも聞き、その意味について思い思いに感じていたようだ。「水」が大敵であることをこうへいなりに感じて、伝えている。はなこを案じての言葉であり、自分と友達との遊びについてこうへいなりに考えた結果であろう。

聾学校に遊びに行き、時間を告げるチャイムや回転灯の存在など自分たちの生活では目にしないものを見たことで自分たちとは違う生活の聾学校の様子に興味をもったようだ。また、補聴器を経験したことで（時間や数の都合で数人だったことは残念であったが）見ただけではわからない様子を体験したためぐみの声を聞いたことでその子なりに理解したように思う。ゆりこの「どうして返事してくれないの」という疑問に「同じようにというけれど同じではないかもしれない」という障害を感じ始めている姿勢を見ることができる。



(3) 聾学校から見た交流の意味 ～5歳児A君の変化を通して～

A君は人への緊張が強く、聾学校では、同じクラスの大好きなB子と一緒に過ごしたり同じ活動をしたりすることが多くみられる男児だった。

ア 交流1年目のA君の様子

1日目は、室内で園児が作ったお化け屋敷にB子と一緒に入ったり、ベランダに出て木の実の冠を作るなど、新しい環境の中で教師に支えられながら遊びを見つけた。

2日目も幼稚園に着くと、A君は昨日の続きをやろうとすぐに室内に向かった。しかし、園児はすでに広い庭で遊び始めていたので、だれもいない室内でA君はB子と何度もお化け屋敷に入ったり、遊びかけのままごとコーナーでごちそうを並べたりした。やがて、外に目が向き、B子と一緒に中庭の家に入った。2人だけで黙ってじっとすわったり、窓越しに顔を見合わせ、のそき込んだりして楽しんでいたので、2人の遊びを見守り、遊びが一段落したところで広い庭に誘ってみた。A君は固定遊具や三輪車で遊び始めたが、遊びに夢中で園児と触れ合う様子は見られなかった。

初年度は、附属の環境を知って楽しく遊べればと考えていたので、A君の興味関心や自らやろうとする意欲のあらわれを大切にするようにした。たった2日の間だったが、A君は附属へ行くことを楽しみにしていて、園内でやってみたい遊びをやってみただけ十分に行い、附属で遊ぶ楽しさを味わうことができたと思う。今後は、A君が抵抗感なく、自然なかたちで園児とかかわりをもちつつ活動するためには、どのように環境の構成を工夫したら良いか考えることにした。

イ 交流2年目のA君の様子

前年度の反省から、初日は環境を狭くして、両校の幼児同士の触れ合いが十分にもてるようにした。遊びの場をホールに設け、運動的なゲームをした後に、引き続き同じ場で体を動かして遊べるよう、両校で話し合いながら一緒に環境を設定した。

★ 第1日目

視覚的にわかりやすい島鬼を全員で楽しんだ後、A君はB子と一緒に滑り台、鉄棒、お化け屋敷、平均台をひとつお見回った後、マルチパネルのバスに乗った。A君は自分が乗っているところに園児が来ると、手を差し出し、うまく登れるように一生懸命引き上げようとしていた。バスに乗っている時間は長かったものの、B子が外に行ってしまうと姿が見えなくなると、床に横になって途方にくれたようだった。

A君が自ら園児にかかわる姿は想像もしていなかった。正直おどろいた。何段も積み上げたマルチパネルを一生懸命がんばって登ることができて、A君は本当に楽しかったのだろう。だからこそ園児にも手を差し伸べることができたのだと思う。この時、園児がA君に身体をゆだね、しっかりと握り返してくれた喜びは、園児が自分を受け入れてくれたという意味で、A君にとってかけがえのない経験になったのではないか。

★第2日目

1日目の出来事を大切にしながらも、A君はB子と一緒に遊ぶことや、B子が遊び始めた戸外ならば、A君も遊びを見ることができるとはなないと両校で話し合い、遊びの場を前の庭に移した。

B子と一緒に池の中に入った。B子が水の入ったビニール袋をバシャリと落としてしまった瞬間、周りの園児が笑った。A君も自分のビニールを落とし、周りの園児が喜ぶ様子を見ながら満面の笑顔を見せた。園児から「もっとやって」と声が上がったので、聾学校担任は人差し指を立てて「もう一回だって」とA君に促してみた。B子とA君は何度も繰り返し、そのうちビニールを持って園児を追いかけ始めた。いつの間にかA君はB子から離れ、一人で池の近くのネットの付いた固定遊具に向かっていった。

園児が笑ったことによって、A君の緊張は和らいだ。園児がA君やB子と一緒に心からおもしろがり、楽しんでくれたからだ。そのため、A君は友達と追いかけて思う存分遊び、その中で友達一人ひとりが違った応じ方をすることを知ったと思う。

★第3日目

A君は自分なりに動き始めたものの、まだまだB子の見える環境が必要だと捉え、園児がいろいろに組み立てて、くり返し遊んでいる洗濯バサミならば、A君が興味をもって取り組むのではないかと話し合い、ベランダに準備した。園児4～5人がシートに座り、それぞれが洗濯バサミでロボットや怪獣を作って見せ合いながら遊んでいた。そこで、教師が「A君も何か作る？」と誘ってみると、A君は足早に園児の傍らに行って、それ程間隔を置かずに座った。そして園児の様子をちらちらと見ながら、へびを作り始めた。出来る度に担任に見せ、安心した様子だった。しかし、しばらくして担任が他児の援助のためにその場からいなくなると、A君は遊びかけの洗濯バサミをその場に置いたままで、教師やB子（どじょうのいるタライで遊んでいた）を探し始めてしまった。

この日最初にやった遊びだったので、A君は緊張しながら一生懸命遊んでいたのだと思う。洗濯バサミの遊びの続きができなかったのは残念だったが、A君がたった一人で園児の中で遊べたことはとても大きな自信となったようだ。A君は少し落ち着きを取り戻すと、前の庭でスクーターで遊んでいた。友達の中に入ってコースを作り始めるなど、この日はB子を追いかけることなく、A君は自分なりの遊びをみつけて楽しむことができた。

〈 考 察 〉

聾学校に戻ってA君はB子を意識せずに、空き箱製作など自分の好きな遊びを十分に行ったり、幼稚部の教師から声を掛けられても、以前ならば視線をそらして避けてしまっていたA君が、今ではにこやかに応じるようになってきた。これは連続した何回もの交流を重ねる中で「A君なりのかかわり」その一步一步を大切に経験させることができたからだと思う。

交流というと「どのようにかかわったらよいか」に目が向いてしまうことが多いが、一人ひとりの心の動きをよく見つめて、その子の興味関心や、やろうとしていることは何か、また園児をどのように受け止めているかを明らかにすることが必要だ。A君の育ちを追ってみて、その子にとって本当に必要感のあるかかわりとは、双方の幼児が充実して活動できた時初めて生まれることを実感した。

このような実践ができたのも両校の職員と一緒に環境を準備する中で、幼児観について理解を深めたからだと思う。改めて感謝を述べるとともに、今後も十分に話し合いながら幼児一人ひとりの育ちに添った実践を重ねていきたい。

(聾学校より)

(4) 5歳児にとっての聾学校交流の意味を考える

耳が聞こえにくいことを除けば自分たちと同じように、ものとかかわったり人とかかわったりして遊ぶ聾学校の幼児に対し、当園の幼児は障害を意識せず交流を行っている。しかし、障害を意識せずに遊んだり生活を共にしていたがふとした場面で障害を意識するようになった。砂場で一緒に遊んでいた聾学校の女児が園庭におかれた遊具の家に入っていったので、幼稚園の女児が3人「入れて」と言って入っていった。にこにこしながら入っていった彼女たちを見てびっくりした聾学校の幼児は3人を押し出し扉を閉めた。「なぜ?」「どうして?」と戸惑う彼女たちに対して聾学校の教師がわけを聞いてくれた。「自分だけでいたはずなのに急に入ってきてびっくりした」ということだった。「入れてって言ったよ」という彼女たちに対して「聞こえなかったんだって」と言われハッとなった。こうした場面がいくつかあった。どの場面でもその後当園の幼児はかかわっていた子から離れていった。しかし、しばらくするとまたかかわりを持ち目の前で「ねえねえ」と手を振るとか体の一部に触れるとかしながら相手に気づいてもらおうとしていた。「聞こえにくいから」「理解してもらえないから」を自分なりに感じ「どうしたら伝えられるか」を考え実行していく。「英語を話している」で終わってしまう4歳児とは違い、違いや障害に対しハッと、「これはなぜ?どうして?」という思いの経験を生かし「ではどうしたらいいの」「どうしたら伝わるの」をその子(たち)なりに考え実行していく。4歳児ではなく、5歳児だから行えることではないだろうか。

交流を通して「自分たちとは何かが違う」ことを認識することは重要である。しかしそれだけで終わりにしてはいけない。「だから私たち

はどうしたらいいのか」を考えられるような交流をしていく必要がある。交流の結果、幼児に障害児や老人などに対し「優しくする」とか「〇〇をやってあげる」という思いをもつことを期待するのではない。（もちろんそれも大切なことではあるが）相手が何を思い自分がその時にどうしたらいいのかを判断し行動できるようになる交流をすることが重要になってくる。障害を意識し自分はどうしたらいいだろうという心が揺れる経験をし、多様なかかわり方や言葉・態度への表し方を考え行動を起こしていく。5歳児にとってこの経験は普段の生活の中にあってはなかなか得がたい経験である。だから、こうした経験ができる交流活動の意味は大きい。

聾学校との交流はまだ、2年目の途中である。これから課題や大きな成果も現れるかもしれない。4歳児・5歳児と見てきた子どもの変化を感じながら今後も交流を通じた研究を続けていと思う。

3. まとめ

～交流を通しての協同的な活動の意味を探る～

これまで国際交流会・聾学校との交流の様子を5歳児の姿を中心に述べてきた。発達を考えたとき、自分を知り、他者を自分とのかかわりの中で感じられる5歳児の交流はとても意義深

いものとなることを感じた。自分たちの生活の場である幼稚園で交流活動を行うとき自分たちの経験（例えば、園内の様子の理解や遊具・用具の活用など）を生かし、今行われている交流とこれまでの遊びを結びつけてかかわることで新たな経験が生まれているとあってよいだろう。

5歳児にとって他者を意識し自分はどうしたらいいのかを考え、行動していくようになる「交流活動」は正に協同的な活動といえるだろう。幼児自身にその意識はないだろうが、交流活動（その日）までの日常の経験や他者に対して培ってきた思いが、交流という状況の中で発揮された形となっている。そのなかで様々なかかわり方を考え、見つけ出し、行動をおこしていこうとする。そのことが相手にも感じられ、遊びが展開していったり深い結びつきとなっていく。

以下に示した図は幼児の「様々な人とのかかわり」による「協同的な活動」をわかりやすく示し交流の意味を考えた図である。様々な人とのかかわりを通して起こる色々な感情を経験し自分自身を知り、かかわりをもつ人のその人らしさを感じていく。その連続が様々な人たちと「共に暮らしていく」ということにつながっていくのだと考える。

